

科学と文学（61・4・18）

小松 左京（昭24・文甲1修）

関東支部公開講演会第一回ということで、西堀大先輩からお名指しがありましたのですけれども、まさか鈴木都知事がお話になるとは思いませんでした。一寸弁明させていただきますと、日本を沈めたり、首都を消失させたものも、よその国は分断国家や、国の消滅というある意味で民族の悲劇がたくさんあります。日本は千数百年、外国軍隊と陸上戦闘をやって、そこが切り取られたという経験は全然ないのです。しかし、この国土は、われわれにとってどういう深い意味を持っているかというのは国土を無くしてみたらくわかるのではないか。『首都消失』の方は首都圏がかなりいろいろなことで投資過剰になってきて、投資効率が低減しつつある。私は大阪府民ですが、七〇年の大阪万国博に鈴木さんが事務総長で来られまして、その関係もありますが、首都圏整備問題とか、首都関係の委員会へ引っ張り出されました。あまりここに過剰投資をしてもしょうがない。またナショナル・セキュリティの問題から考えれば、多少分散したほうがいいだ

ろうということ、大阪の千里に大きなコンピューター・センターをつくりはじめていて、銀行なんかがダブルファイイルといって、東京と全く同じファイイルを大阪に持とうという動きもありましたが、日本全体の運営に関して、東京ばかりに頼らないで、それぞれの地域も頑張るべきではないかという論を展開するために、フィクションの中で首都を消失させたわけです。

私どもは昭和二十三年の四月に三高に入りました。一年経ったところで、学制改革で昭和二十四年三月に、一学年修了ということ、その年にできました、新制大学の第一回に九月に入りました。

一年先に三高に入った方の三高の卒業は二十五年ですが、私どもは本当に一年しかいなかったわけです。ですから、後ろを見ても、後輩は誰もいない。先輩ばかりで、しかもその先輩たるや、鈴木都知事は昭和五年に三高をご卒業になったということですが、その翌年に私が生まれていて、その三高から、一番最後になって日本を沈没させたり、鉄を食う人間ができたりという、変てこな小説を書く人間が出てきたわけでして、題名は「科学と文学」という堂々たるものですが、どうしてそうなったかというお話から始めさせていただきます。

科学小説は日本ですと、押川春浪であるとか、海野十三であるとか、山中峯太郎とかいう作家がいますが、ほとんど子供むけの読みものとして書かれました。しかし、欧米の場合はちょっと違います。古くはモアやスライクトがいますしH・G・ウェルズも高く評価されていますし、オル

ダス・ハックスレイやジョージ・オーエルも大変高く評価されています。

私は昭和六年に生まれまして、早生まれですから、小学校に上がったのは昭和十二年です。このときに中日戦争が始まりました。それから、小学校の四年のときに、当時大東亜戦争と言っていました第二次大戦が始まりました、中学校へ上がったときが昭和十八年でした。それから、昭和二十年の終戦の年が中学の三年でした。その時は動員で神戸の川崎重工で潜水艦の溶接なんかをやっていたわけです。これは余談になりますけれども、同じ年ぐらいの祇園の芸者といういろいろ話をしていまして、「戦争中、あなたは芸者をやっていたの」と聞くと、「やっぱり動員に行きましたよ」、「私は落下傘を縫っていた」と。ひどいものですね。その話をしていると、「あっ、そう言えば、あのときにあの落下傘の糸を止めるのを忘れてたわ。まあ、かわいそうに、あの人はどうしたやろう」と。湯浅電池で潜水艦のスイッチを作っていた人もいる。「では、私のスイッチがおたくの潜水艦についたかもしれませんね」という話をしたわけです。

小学校時代から、私自身は小説を読むのが好きでした。特に戦争中は娯楽がありませんし、多量に読ませてもらったので、親と教師に隠れて、そこら辺にある本を皆読んだのです。神戸一中の図書館も、表には「臣道実践」などといったタイトルの本がならんでいますが、裏のほうには世界文学全集がだいぶ隠れていました。ダンテの『神曲』は実はそこで初めて目にしたわけです。中学校の二年でした。大変よく殴られたので、自ら慰めるために、そこに入ってこっそり本を読んだ

りしていました。昭和十九年ぐらゐになりますと、あちこちで疎開が始まりました、特に古本屋さんで疎開し始める。それから疎開の荷物はこびに学校の先生なんかの家へ手伝いに行きまして、そのときに蔵書をかなりくれたわけです。そういうものを読むしか本当に娯楽がありませんでした。終戦になりました、いままで敵性文学であるとか、聖戦遂行に役に立たない不良図書と言われていた小説の類いがドツと社会の表面に出てきました。占領軍の方からアメリカのミステリーのペーパーバックが放出されてくる。そういう中でドストエフスキー全集を中学五年のときに読みまして、夢中になり、自分も行く行くは文科系のほうに行つて、それも文学の研究ではなしに、できたら創作の道に入りたいと、かなり早くから思つていたのです。そのうち、私は一年だけですけれども、三高の文科甲類に入りました。

そのころ私自身はまだ若くてよくわからなかつたのですが、ある意味で、文学というものは、日本もそうですが、世界的に大変な危機状況にあつたわけです。戦争中、文学というのは恋愛物を書いたり、姦通物を書いたり大変耽美的なものをうみ出し、これは聖戦完遂のために。士気高揚によくないというわけで、弾圧されたわけです。言つてみれば「表現の自由」「言論の自由」「思想の自由」が非常に弾圧された。軍国主義と全体主義の時代だつたわけです。文科系の大学生は徴兵猶予がなくなり、またいまで言えば第三次産業に属する人は徴用にかかつていく。文学関係の人たちも「お前らは文章がたつのだつたら、戦争の現地に行つて、日本の軍隊がいかにか苦し

て戦っているのかの報道班員になれ」という形で、戦地へおくり出された。戦後になりまして、それがなくなつて、大変自由になつたと思つたのですけれども、実はそのとき、日本だけではなしに、世界の文学はもう一つのクライシスに差しかかつており、私もその点である時期に大変悩んだわけです。

これは戦争中とよく似た構造の危機だつた。つまり文学は生産に役に立つことはない。お米一つ作らないし、機械一つ作らない。こんな物を書いて人に読ませて、それでお金をもらつてゐるというのは、娯楽としてはわかるけれども、そんなものは社会の何に役つのだという考え方です。その問題は私の家庭でも出てまいりました。父親が理化学機械をつくつていたのでどうしてもその論議が出てくる。五人の男の兄弟がしまして、そのうちの三人までが京大の冶金に行つたのですが、私が「こちらへ行きたい」と言うのと、「そんな文学なんかをやつて、飯が食えると思ふか」というわけです。しかし、どうしてもそれをやりたかつたので、だいぶ喧嘩をしまして、「文科系に行つてもいいけれども、できたら、法学部、経済学部に行け」と言つていたのを、それならいっそ一番食えないところがいいだろうということで伊文に行つてしまつたのです。しかし、文学というものは何か存在価値がある。これだけ人類の歴史の中で残つてきたのだから何かがあるはずで、それを求めたいと思つておりました。

昭和二十二、三年でしたか、豊島与志雄さんという英文学者が左翼系の評論家の除村吉太郎さ

んと対談しまして、除村さんはラジカルな左翼の評論家でしたから、「文学なんていうものはなんら生産的なものを持っていない。物を作っていない。それは革命を起こすための政治的アジターシヨンのパンフレットを書くためにだけ意義がある」とおっしゃっていた、これはまたすごい時代になってきたとシヨックをうけました。そういう文学にとつての危機的状况はヨーロッパにもございましたし、世界中にそういう状況が進展しつつありました。私自身もどうせ好きな道をする以上は、文学は何のためにあるのだろうか、そういうことをはつきりさせないといけないだろうと思いました。表現の自由は確かに与えられた。しかし、表現の自由の裏に、その自由を使つていかなるものをもたらずかという、使う人間の責任というものは、これは時代を越えて問われる続けるだろうという気がしたわけです。

文学は戦後非常に華々しく出てまいりましたけれども、世界的に見て、もうかなり息切れの傾向を見せている。ご存じのように、サルトル、カミュ以後の世界に大文学者、大小説家は最近出てきていないのです。ノーベル賞も中南米辺りの古い作家を発掘するとかソ連のパステルナークや、ソルジェニーツェンに与えています、あまり「大」新人は出てこない。シェークスピア、ゲーテ、近代でのエミール・ゾラやモーパッサンといった、ヨーロッパで輩出された文学の伝統もダウンし始めた。戦後の世界での文学の衰退に対して科学技術は非常な勢いで発達してきました。文科系と理科系の学生の売れ口を考えますと、日本は戦後文化国家になるのだと言っていたけれ

ども、法科、経済を除いて、文学科の学生というのは先生ぐらいしか就職口がない。新聞社に行けたのは、非常に運のいいほうです。こんな状況でいまでもずっとダウンしていますし、なにによりそのパワーがダウンしているのです。

一方、科学技術についても、その内部には大きな問題が起こってきつつあった。科学技術は非常に巨大になったために、人類の運命を左右する力をもってしまった。ご存じのように、第二次大戦中に技術の破壊力はどんどんエスカレートし、一九四五年には核兵器が作られ、昭和二十五年について水素核融合爆弾を作りました。この辺になりますと、もう「種的」自殺兵器に等しい。

科学技術は、われわれがこの間まで空想の中の問題だと思っていた物をどんどんクリアーする。第二次大戦中にレーダーと成層圏を飛んだ爆撃機のB29、それからジェット戦闘機。そしてドイツはV2号という大陸間弾道弾の原型を作っていました。これはロンドンに打ったのですが、本当はニューヨークを爆撃するつもりだったそうです。もしドイツが原爆を先に開発していたら、二十世紀後半の世界中が変わっていたかもしれません。

さらに、戦後の基礎科学の発達によって、十九世紀以来の常識となっていた宇宙像、人類像も大きく変わり始める。銀河系というのは千億か二千億の恒星の集団でして、直径は大体十万年光年と最近まで言われていましたが、つい数ヶ月前の発表によると八万五千万光年です。こういうのが

宇宙空間に無数にある。宇宙空間全体は大体半径百五十億光年ぐらいになる。宇宙がこういうものとはつきりしてきたのは実は一九三〇年代で、それが確定的になったのは一九四〇年代なのです。これはハッブルと言う人が星の距離の測定法が確立されてからいろいろな星雲を観測しました。戦争前にウイルソンの天文台が稼動し、写真技術も発達してきたので、精密観測を丹念にやりはじめ、一九二〇年代の終わりから、ひよっとすると、アンドロメダ星雲というのは、ふつうのガス星雲よりもっと遠いのではないかと言いつ出したのが、ハッブルなのです。彼はアンドロメダ星雲は大体七十万光年ぐらい向こうにあるといい出した。そうすると、銀河系の直径は十萬光年だから、当然銀河系の外にあって、銀河系と同じような組織を持っている星の集団ではないかという事になりました。

ハッブルはもう一度戦後測り直して「距離を測り間違えた。七十萬光年と言ったけれども、あれは百五十萬光年離れている」という。いまは二百十萬光年離れていると言います。いまはアンドロメダ「星雲」ではなく、「アンドロメダ・ギャラクシー」と呼んでいます。われわれの銀河系だけは「ザ・ギャラクシー」と大文字で書いているようですが、とにかく、これが私たちの銀河系に一番近い別の銀河系で、その後何億という銀河系がみつかり出しました。

もう一つ核エネルギーの解放があります。アインシュタインの特殊相対性理論は一九〇五年の発表で、その二年ぐらい前にライト兄弟が飛行機で初めて二百メートル飛ぶのですが、いまは飛

行機はご覧のとおりです。あれはまだ百年経っていません。この時、彼は $E = mc^2$ という、実に美しい法則を見つけました。別にそんなものを作るために彼はそれを発見したのではないのです。うが、それを手がかりにして最後には核兵器ができてまいりました。チャドウィックが中性子を見つけ、湯川先生が中間子で核力を見つけると、核の中の非常に大きな力を引っ張り出せるようになってきた。

一九五〇年代になってきますと、生命現象について、大変な革命的発見が起こります。ワトソンとクリックという人が非常に小さな一つの卵細胞が分裂して元々の親ができ、蛙の子は蛙になっていく。そのための情報は全部 DNA という細胞の中の物質に書かれている、いわゆるセントラル・ドグマを発見した。これが糸口になりました、生命というものの解明が急速に進んできました。あとには生命がどうしてうまく協調をやっているか、生命が三十五億年ぐらいの進化の間でどうしてこうなったか。そういった詰めは残っていますが、生命の大ものほうはほとんど解明されてしまった。

もう一つ大きく変ってきたものは、人類社会の歴史像です。偉大な歴史書に司馬遷の『史記』があります。それに倣って、中国が大体次の王朝が前の王朝の歴史を書く。あるいはヘロドトスの歴史がある。それから、近代になってきて新しい歴史学がヨーロッパで行われてきて、ランケ

の世界史学がある。日本も六国史から始まって、歴史書はずっとあるわけです。それを束ねて、まずヨーロッパで十九世紀に世界史を書くという一つの試みが出てまいりました。

しかし、これもある意味でヨーロッパ型のバイアスがかかっている。ヨーロッパがアジアを見る目は、アジアがヨーロッパを見る目と違うというのは、世界史を本当にやろうという人たちはすぐわかったと思います。東洋史学をやっている人と世界史と称してヨーロッパの史学をやっている人は、われわれの時代の歴史学者でも、一緒になって共同作業をやろうという気運はまだ起こっていません。

しかし、人類というものの姿が徐々にはつきりしてくる。一つは自然史、博物史のほうも、戦前から戦後にかけてかなり進んでいます。もちろんダーウインの『種の起源』があり、『進化論』があり、さらにたくさんの化石生物学が発達して、それが分類整理されるようになってきた。戦後は放射性物質を使って地球の年齢をかなり正確に決めることができるようになってきました。

ご存じのように、いまはウランの半減期をもとにして地球の年齢は約四十五億年とされています。古生物学のほうでも顕微鏡の化石学が発達して、微細な生物の痕跡が見つかるようになってきた。いまのところ、大体生命の発生は三十五億年ぐらい前だろうという事になっています。その間に何回も生物の種の大転換が起こっている。こういうのは十九世紀の終りから徐々にその調査が発達してきたのですが、やはり戦後に自然史がまだかなり荒っぽいけれども、シユアなものに

なってきました。その基盤にたつて世界史を書くときに、どこからどう書き始めたらいいか、シユメールは大変古い。BC三、四千年前から始まっている。中国も結構古い。エジプトも古い。しかし、その後この文明は、中国を除いて大体へたばってしまった。その後の人類はどうなってきたかということを書くときに、ある地域の物の見方で書くと、大きな文化的バイアスがかかる。これは日本も戦争前にこれにかぶれるのですが、ある民族の選民論、エリート論ともつながりかねない。戦後はその点がよく反省されました。植民地支配の正当化がいけないし、優秀な者が劣等な者を支配するのは当然だという考え方は傲慢きわまりない。ナチがその考え方を露骨に出してきました、ユダヤ人の弾圧がある。戦後はヨーロッパのほうはその反省がありました、日本も日本民族を夜郎自大的な形で重視するやり方があったが、それに対する反省が起ってきました。では、こういう「偏見史観」に対する、オールタナティブはどうやるのだという事になりますと、一つは比較史、もう一つは、文化人類学のエクスペディションとそのデータの集積がかなりの成果を上げてきたから、これを利用すべきではないかと思えます。現代の人類社会はこちら側でコンピューターと宇宙船を扱っている人間がいるけれども、まだ未開社会と呼ばれている石器時代の人たちもいる。これが人類の状況である。いまの人類は少なくとも数万年前までは初期農耕と牧畜をやっていたぐらいで、いまみたいな文明はどこにもなかった。近代技術文明は確かにヨーロッパに起こったかもしれないけれども、その前に技術文明はたくさん起こって、かなり壮

大なる事をやったがあるものはへたばった。しかし、地域によっては文明のハートは残っているという事です。

そういうことでまだ『人類史』という本は書かれていませんけれども、そういう社会人類学、あるいは文化人類学のフィールドワークを通じて、人類の像が次第に浮き彫りになってきた現状がある。世界は、ある地域のある時代における予言者の神の予言どおりにもなっていないし、宗教もいろいろバリエーションがある。似たようなバリエーションもあるし、非常に変わったバリエーションがある。どちらが絶対、正しいとはいえないという事もはっきりしてきました。

そうなってきましたと、科学のもたらす、人類とそれを取りまく世界についての基本的認識の容というものは、非常に古い伝統的な人間の営みの一つである文学においても、何を書くかという事についてやっぱり変容をもたらさざるを得ない。哲学のほうからは現象学や論理学がツールを提供してくれて、文学、あるいはフィクションがどういう構造を持っていて、どういう意味合いを持っているかというのは、割にしっかり分析できるようになってきました。そういうもの同士き合わせて、現在「文学の科学」というものがようやく形成されそうな気配になりつつあります。

科学も最初のうちは、最近のように独立した勢いのいいものでございませんでした。どちらかと言うと、宗教や技術に付属していまして、いまの宇宙物理学、あるいは天文学の類はご存じの

ように、古代政治に必要な、曆をつくつたり、星占いをやるための、天体観測から始まった。つまり、完全に政治に、あるいは神学に所属していた。この宇宙の自然の中に神の摂理を探すために、近代物理学が出てくるわけです。技術のほうは、優秀な技術は王様などの所有物だったので、これが現在のよな形で、人間の社会をどんどん豊かにし、地球の状況を変え、一方においては、政治的選択を間違えると、人類史どころではなくて、地球の生命史さえストップさせるかもしれないというところまで来てしまったのは、本当にここ百年ぐらいの間だろうと思います。

こういう時代に、文学をやっているから科学のことは知らなくてもいいのだというわけにはいかないでしょう、文学は人間とその社会のことを全部に「生身の個人」の立場から問題にすると言つた場合に、人間のやっているそういう営みの意味は当然問題になってきます。科学者や政治家は一体どういふつもりでこういうことをやっているのか、ということの意味を文学は取り扱わざるを得ないでしょう。

確かに文芸に關しては何百年前に編み出された形式を繰り返し繰り返し再現して結構喜んでゐるということがあります。古典落語の場合ですと、あるいは歌舞伎もそうなのですから、その原型は十四、五世紀の狂言にある。その狂言の原型を探っていくと中国にあって、中国のそれはまた、インドなりイランのほうから伝わってきてゐる。もとを尋ねると、とにかく二千年前ぐらい遡つてしまふ。

そういう変わらないものもあるけれども、やはりそういった時代と違うということは、われわれの時代にはそれをただ再現し守っていくというだけではなしに、そういう手法を使いながら、この時代のことをこの時代において書かれるにふさわしい文学を作り出そうと思つたら、やはりこういった問題を扱わざるを得ないだろう。

そういう問題に直面した時に、たった一年ですけれども、私は三高に入つて本当によかつたと思ひました。特に京大に入りますと、理科系へ行かれる方も文科系に行かれる方も、非常に交流が厚い。人文科学研究所なんかができましても、あそこでは今西先生が動物生態学の話をして、こちらに貝塚先生がおられる。こちら側には会田雄次先生がおられると思つと、こちらには梅棹忠夫さんがおられる。三高の先輩後輩のコネクションをたどると、物理学はこれからどうなりますかなんていうお話を、私は湯川先生にじかに聞けるわけです。生物の問題でここがわからないという話を文学部文学科を出た、しかもイタリア文学という変なところを出た人間が今西先生に、あるいは梅棹先生にさわりのさわりのところを伺うことができた。また一方、西堀先生の書かれた『南極越冬記』は私のバイブルになっています。何も柳花紅灯の巷、男女の情のどうのこうのを書くだけが文学ではない。ドキュメンタリーです。『南極越冬記』とか梅棹先生の『モンゴル族探検記』は自分で行かれて、人間を観察し、そのときのその社会を観察されて書かれているのですけれども、なまじなフィクションではかなわなほどの人間的な深みが見えるわけです。そう

いう事が「文学」を志す人間には大変な刺激になる。

そういう方々に触発されまして、私自身はどうして人間が文学というものを生み出してしまったかを、かなり広いグルントに立って考える事ができました。こういう見方を可能にしてくれたのは、大変運がよかったと思つていますが、三高、京大の雰囲気私が私にそういう考え方を可能にさせてくれたのだらうと思います。いずれにしても、科学も文学も人間の精神的な活動、営みの二つの形式であることは変わりがない。その中間に哲学がある。歴史がある。歴史と哲学、それから文学は文科系だけれども、ちよつとずつ形式が違うだけに、探求するところが違います。もう一つ、人間の環境に具体的に働きかける技術というものがあつて、人間が行つてみたいという宇宙空間にも行けるようになり、コンピューターも出現しました。そしてそれを使った認識諸科学は、宇宙はどうなつていゝのだ、生命はどうなつていゝのだ、人間はどういゝ構造を持つていゝ、どういゝ歴史を持つてどうなつていゝんだといゝ、そういう形で人間とその周りの事を遠心的な探求をします。

しかし、これは人間がやつていゝことですから、最後にはいまのわれわれの一人一人の具体的存在する人間の条件に還元されます。ここ当分の間、人間は男女の営みによつて小さな受精卵から母体の中ではぐくまれ、無垢の嬰兒としてうまれ六十年から七十年八十年間生きて、最後にはかなり老衰して死んでいくといゝ条件はかわりないでしょう。その人生は誰に代わつてもらふ

こともできない。しかし、他者に対する感情移入であるとか、擬似体験をフィクションの形で与えることによって、孤立した実存というものが自分自身の人生の限定された原型をどんどん二次的に拡大することができる。つまり、人間は他人に対する感情移入、あるいは他人に対する一つの洞察力を持つことによって、人間は実存的な孤立から解放され、消極的には、外延的に発見されてきた「種社会」「地球」「宇宙」というものとさえ親和的に一体感をもちうるだろう。

宇宙空間の広さ、生命現象、これには物質的な基礎がある。仕組は大変複雑ですけれども、所詮これは有機系物質の蛋白質なり酵素なりがDNAの信号によって組み立てられ、それが協調して非常にうまく働いている結果である。人間は有機的な機械だ。宇宙は非常に広大深遠でして、百数十億年前、全宇宙の物質が全部一つに固まっていた時期があり、ある時ビッグバンという現象があって、その物質が大爆発をおこし、百数十億年かけて拡散して現在のような形になってきた。それがこれから先どうなるのか。人間は宇宙の広さを知り、その中の地球のスケールを知るようになってきた。その人間がまわりの宇宙に仲間をさがしてみたら太陽系の中に生命の仲間はいない。ひよっとしたら、宇宙の中で目覚めている意識、知的生命体は人間だけか、それともほかにも自分たちのような存在はあるのかということになりまして、おそらく二十二世紀ぐらいから、人間は宇宙へ探求に出かけて行くだろうと思います。

これは未来の人に残された課題です。われわれがそういうグルントリツヒな認識を科学の方法

で得たときに、一方で一人の自分という存在はこんなにかっぽけな存在で何の意味があるのだ。人間が見ている宇宙、人間に見られている宇宙と人間との関係はどう考えたらいいかという問題に出あうと思います。これから先おそらく人間の「精神的クライシス」はそこらあたりに生じてくると思います。非常に巨大なニヒリズムが発生するかもしれない。しかし、そのときに何か人間が、太古から開発してきた体験の拡大の方法、つまり一人の人間は死んでも、自分の分身の子供たちが見る世界が向こうにある。だから、子供たちがわれわれより先まで生き延びて、そのときに子供たちへの感情移入がうまくいけば、自分の人生が延びたに等しい。そういう仕掛けがニヒリズムからの救済になるのかも知れない。この仕掛けこそ、「文学」「小説」の根源的なものであると思います。人間の所与の能力であるイマジネーションによる他者との融合の能力、この他者は最終的には宇宙との融合も可能かもしれません。

ひよっとすると、ヨーロッパの神学、ヨーロッパの哲学では出てこなかった仏教的な宇宙観や組織論がそれを可能にするかも知れない。アジアでSFをやっている、心からよかったなと思っただのは、向こうのサイエンス・フィクションの宇宙、未来はほとんど旧約聖書が基になっています。「ノアの箱舟」から「最終戦争」、「最後の審判」から全部その原型になっているのですが、それとはまた系譜のちがう壮大な宇宙観が東洋にありました。やっぱり仏教というのはものすごいもので、その考えを身近なものとして利用することができ、アジアでSFを書いていて大変幸せ

だったと思いました。いずれにしましても、科学自身は科学の意味を答えることはできないけれども、文学の側は科学が人間にとってどんな意味があるか。それから科学のやることに対して、いつもわれわれに親しい生身の、そして誰もが同じ条件で生まれてきている「人間」というものとの関係をはっきりさせることによって、将来科学の方向づけを、「総体としての人格」の立場から与える事ができるかも知れない。

かつて、科学が建築技術と提携しまして、構造力学という力学の新しい分野を開いた。数学と科学が共同することによって、アインシュタインの相対性理論や量子力学をはじめ、すばらしい展開が見られたように、次には科学と文学が人間の将来のために共同できるかもしれない。まだ文学のほうはそれほど条件が整っていませんが、そのことによって、科学技術の持っている技術的可能性がオートマチックに拡大され、いつか人間の制御の手を離れるかもしれないという一面の恐しさに対して、そうなる以前に、何かチェックをかける根拠を、文学はあたえられるかも知れない。科学者と一般の専門家でない人たちとの間を媒介して一つのコンセンサスを形成する場として、文学はこれから先、科学との共同の場において大きく役に立つのではないかと考えております。

どうせここまでSFを書いてきたのですから、あと死ぬまでこの方向をもう少しおしすすめる事を、科学関係、あるいは人文学関係の先輩諸氏のお力を借りながら続けていきたいと思ってお

ります。本当に、科学との関係において、文学がようやく一つの責任を背負うことができるようになってきたというのが、最近の私の考え方でございます。

あちらに飛びこちらに飛びで大変長くなってしまいましたが、これでお話を終わらせていただきます。ありがとうございます。

(作家)